

い上座仏教の役割や貢献を示した点において、高く評価されるべきものである。筆者はタイ宗教・社会研究の後輩として、本書から多岐にわたって多大な示唆を得た。今後も各著者の研究のさらなる展開を期待したい。

(林 育生 [LIN Yu-Sheng]・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

黄蘊 (編). 『往還する親密性と公共性——東南アジアの宗教・社会組織にみるアイデンティティと生存』 京都大学学術出版会, 2014, iii+266p.

本書は、京都大学「親密圏と公共圏の再構築をめざすアジア研究拠点」のプロジェクトの成果であり、新進の若手研究者 7 人による編書として、シリーズ『変容する親密圏/公共圏』の一冊を成している。

広く知られているように、公共圏を対象とする議論はハーバーマスに始まった。しかし市民による討論空間が世論を形成し、政治権力へと対抗する公共圏を形成するとの“西洋的市民”を中心とした概念は [ハーバーマス 1973]、社会的弱者を切り捨てる可能性をも孕んでいる。では、急激な近代化が押し進められる東南アジア地域において、女性や貧民など周縁化されてきた人々は、いかに生存し社会と関わっているのか。これが本書の問いである。

通常このような者たちは、私的領域である親密圏を形成し、相互扶助により生存を図るだけでなく、時に団結し公共圏に対抗すると認識されてきた。これに対し本書は、親密圏—公共圏を分けず一体のものとして捉え、共同体はその濃淡の中を変化していると言う「ベクトル論」による考察を唱える (p.4)。このような視点に基づき本書では一貫して、親密性の強い共同体が、公共性を志向し変化する過程が描かれている。共同体はいかなる時に公共性を持ち、その変化は、どのような社会状況と権力関係を示しているのか。本書は、東南アジアにおける宗教・社会組織の変化を通し、親密圏・公共圏を捉え直そうとする労作である。

本書は序章と終章の他、以下の 4 部 7 章から構成されている。

■ I 部「親密圏による公共性の構築、獲得」

第 1 章 「過平安橋」—— シンガポールの広場に出現するゆるやかな公共性の場 (伏木香織)

第 2 章 家庭内祭祀から公共領域へ—— マレーシア華人社会における「盂蘭勝会」の都市的構造 (櫻田涼子)

第 3 章 移民社会における「親密圏」の機能と変容—— マニラ華人社会における伝統的組織 (松嶋宣広)

■ II 部「公共性・公共圏の意図せぬ生成」

第 4 章 民衆が創出する都市の親密性と公共性—— ベトナム・ハノイの宗教施設「ハビ亭」と同郷会 (長坂康代)

第 5 章 スピリチュアリティの親密圏から公共性へ—— イスラーム世界マレーシアの「仏教公共圏」 (黄蘊)

■ III 部「地域社会の親密性・公共性に通時的にかかわる『伝統的な力』」

第 6 章 親密性・公共性の変容と伝統的な力—— 北タイ・チェンマイの霊媒術を手がかりに (福浦一男)

■ IV 部「複数の公共圏の競合とその中での往来」

第 7 章 貧者にとっての親密圏と公共圏—— マニラ首都圏における露天商組織の連帯と抵抗 (日下 渉)

I 部の 1-3 章では、シンガポール・マレーシア・フィリピンの華人共同体が分析される。従来、同郷・同業者組合として閉鎖性が強調されてきた華人共同体であるが、近代化に伴い存続が危ぶまれるようになっていく。彼らは、いかなる生存戦略の下で組織を維持しようとしているのか。これが I 部の問いとなっている。まず第 1 章ではシンガポールを舞台として、霊媒集団が組織する宗教儀礼が分析される。この儀礼は新聞で告知された後に駅前広場で催されるため、不特定多数の人間の参加を前提にしている。外部から参加する者の多くは、医療・年金・高齢者問題など政府が未対応の社会問題に直面しており、霊媒は彼らに精神的

な救済を与える。しかしその一方で、問題の根本的な解決を目指し、政治・社会運動へと結び付く事はない。著者はそこに、共同体外部の者も取り込み緩やかに連帯し合う、公共圏の出現を見出している。続く第2章では、マレーシアの住宅団地における盆儀礼の変化が分析される。従来は旧暦7月に親密性の強い共同体単位で行われる儀礼であったが、人々の移動が増加した近年は居住地単位で行われ始めている。伝統的社会から離れた者たちが集う「場」で行われるようになった盆儀礼は、互いに無縁であった個人々人を再結合する役割を果たしている。また、この儀礼集団は「盆」という季節的なものから拡大し、慈善団体として活動を定着させつつもあり、そこに親密圏の拡大が認められている。第3章では、宗親会・中華総商会・華文学校という、華人共同体を代表する諸組織が事例となる。しかし彼らであっても人員の減少は否めず、海外進出や現地化などネットワークの拡張を余儀なくされている。この拡大は自らのアイデンティティを弱める可能性を持つ一方で、公共空間への進出を可能にするものでもある。新しい成員を取り込むことで公共性を獲得し、「緩やかな連帯」を軸とした新しい親密圏を築いているのである。

II部の4-5章では、ベトナム・マレーシアの都市部を舞台に、親密圏の変質が分析される。多種多様な価値観が混ざり、複数の選択肢が存在する都市において、なぜ住民たちは親密的共同体から公共性を派生させているのか。この選択の背景にある社会状況が明らかにされる。第4章では、首都ハノイに位置する「亭」という施設をめぐる、地域住民と行政との折衝が描かれる。この施設は都市住民にとって、出身村落の守護神を祀る宗教機能と、集会所という社会機能を併せ持つ、曖昧な存在であった。しかし近年、社会主義政権により宗教の再評価が進み規制が緩和される一方、都市開発により史蹟管理が強化されたことから、住民たちは自治を求め、「亭」の重点を宗教寄りに変えていく。そこには、広く周辺住民に開放し支持された宗教施設となることで、政府の管理から逃れようとする住民側の戦略が存在している。第5章では、マレーシアにおける上座仏教の変化が、

伝統的寺院と修行型新興寺院の事例を基に分析される。上座仏教の在り方でさまざまなマレーシアであるが、慈善活動や短期体験プログラムなどを通して、海外との結び付きが強化され始めている。この背景には、人材・資金面で大きな割合を占める華人の志向と、広く英語が用いられるため「脱国家化し易い」マレーシア上座仏教界の事情が存在している。上座仏教としての知識を守りながらも、ニーズに合わせ国内外へと活動を広げていく様子を、国境を越えた親密圏の成立が指摘される。

III部を構成するのは6章のみであるが、ここでは社会の「伝統知」が、いかに今日の親密圏・公共圏に関わっているかが考察される。その伝統を体現する存在として取り上げられるのは霊媒師であり、彼らは今日、その人数だけでなく影響力を拡大させている。著者はタイプの異なる2人の霊媒への調査を通し、彼らが持つ適応性こそが、その影響力を保持させ、今日まで存続・拡大してきた理由であると指摘する。近代化が進み都市住民が増える中、霊媒たちは伝統的な親密性および秩序を重んじながらも、顧客の精神的要求に適応し続けることにより、自らを中心とした親密圏を構築しているのである。

IV部は、社会に同様の公共圏が複数存在することを前提に、その利害関係や衝突を描いている点において、他の章とは視点を異とする。それを構成するのは第7章であり、フィリピンの貧困層である露天商を事例に、市民的公共圏と大衆的公共圏の競合が論じられる。彼らの生計は不法占拠・街頭販売といった非合法的活動を伴っているため、しばしば「市民」からの批判に晒される。政府は新たな法的枠組みを創設することで露天商らの活動を規制しようとするが、貧困層は賄賂などを駆使してこれを回避し、市民からの排撃に対しても互助関係を発展させ対抗する。つまり、法治主義を強化すればするほど、不法行為（賄賂）が強化されるジレンマが生じているのである。著者は、この解決のために露天商たちの意向を反映した新しい法的枠組みの必要性を指摘した上で、市民的公共圏側からの働きかけ・妥協の必要性にも言及している。

何よりも本書最大の特徴は、視点の多様さと、

その記述を可能にしている情報量の豊富さであろう。また著者たちは共通の問題意識のもとで組織に焦点を絞った調査・考察を行っているために、「親密性の強い共同体が拡大している」との議論の方向性が明確である。従って本書を通読することにより、国家制度や社会状況といった諸条件や内因・外因の異なりを超え、今日の東南アジア社会において社会的弱者の共同体が拡大傾向にある様を確認することができるだろう。

しかし上記に挙げた視点の多様さは、一冊の書籍としての本書に、散漫な印象を与えてしまう可能性を持っている。副題に『東南アジアの宗教・社会組織』を掲げながら、本書の大半が中華圏の事例に集中しているように、その要因には章構成の偏りが存在する。議論の内容としても、互助組織・ネットワーク・伝統復興・曖昧性など、華人研究を前提とした議論が展開される 1-5 章と、より広い社会性を対象とした 6-7 章とが乖離している点は否めない。その結果として、序章における数々の問題提起が、「様々な動機、戦略のもとで多種多様な、また伸縮可能な親密性を結んでいる」(p. 252) との結論に収束してしまった事は残念であった。

加えて、せっかくのベクトル論が「親密圏が公共圏寄りに拡大している」という方向性を示すことで終わり、濃淡に関しては殆ど描写されていない点も気に掛かる。本書では共同体が「ネットワーク/互助」を軸に拡大していく様が肯定的に捉えられているが、そもそも超場所的な空間とは公共圏に限られたものではない [テイラー 2011: 145]。ならば事例を増やすだけでなく、それぞれの共同体が持つ排他性と向き合うことで、拡大の内容と背景の因果関係まで論じる事が可能だったのではないか。例えば本書で扱われた多くの共同体では、公共圏が持つはずの言論空間が形成されぬまま、社会活動や海外進出など特定の方面への拡大ばかりが認められているが、これは単に、言論空間を形成できなかつた結果に過ぎないのではないかとも思ってしまう。このような疑問に答えるためには、外部社会との関係性をより客観的・多角的に分析する視点が必要だったように思われる。

もっとも、上に挙げた指摘は編書の難しさを示すものである。今日生じている共同体の変化を通し、東南アジアにおける近代を再考する本書の姿勢は広く共有されるべきであり、今後の研究継続が期待される。

(北澤直宏・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

参考文献

- ハーバーマス, ユルゲン. 1973. 『公共性の構造転換』細谷貞雄 (訳). 東京: 未来社. (原著 Habermas, Jürgen. 1962. *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. Neuwied: Luchterhand.)
- テイラー, チャールズ. 2011. 『近代——想像された社会の系譜』上野成利 (訳). 東京: 岩波書店. (原著 Taylor, Charles. 2004. *Modern Social Imaginaries*. Durham: Duke University Press.)

石原正仁; 津田敏隆. 『最先端の気象観測』シリーズ新しい気象技術と気象学. 東京堂出版, 2012, 175p.

本書は大気の中で起こっている現象である「気象」観測に関して、GPS 気象学、宇宙からの気象観測、リモートセンシングなど、最新の気象観測を一般向けに解説している。気象学自体は理学であり、論理の美しさや、個別の現象の解明が求められる。しかし気象観測や天気予報には多分に工学的センスが必要であり、本書における著者のスタンスもやや工学寄りである。気象観測は理学と工学の融合という視点で見ると最も成功した分野の 1 つであり、しかも世界的に日本がトップクラスと認められている分野である。現在の地位を築くに至った先人達の努力を、現場における小話も交えながら分かりやすく解析している。

本書の構成

本書は 8 章で構成され、第 1 章「気象観測の全体像」では、地球大気の成り立ちと構造に関して、